四季シリーズ

ジョン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
四季シリーズ

【Ｎコード】
Ｎ５４０２Ａ

【作者名】
ジョン

【あらすじ】
私の家は三人家族、私、兄、姉、の三人だ。何もかも普通でちょっぴり従兄弟に恋する私。口と酒癖が悪いけど美人で文武両道なお姉ちゃん。全てに優れ欠点無しと言われるお兄ちゃん。でも、このお兄ちゃんは・・・とんでもないモノに恋をするんです！そんな慌しい家族の一年間のお話です。

夏だけの恋人（前書き）

えーっとはい。
昔某所で書いた日常系のお話です。
ちなみに妹の遥は
私がここで連載している緋色の眼にも登場します＾＾

夏だけの恋人

今日は七月四日、特に何の変哲も無い暑いとしか感想が残らない一日だ。
アメリカでは独立記念日みたいだが日本人の俺には関係ない。
俺は今、学校が終わり幼馴染の桜と一緒に帰路についている。
「ねえ、徹宵…何であの子振ったの？」
桜が唐突に聞いてくる…そういや今日んな事あったな。
俺が真面目に答えると桜はため息をつきながら言う。
「あん？だって俺には彼女いるもん」
「アレが彼女ね…まあ、いいか……んじゃ」
それだけ言うと桜は自宅に向かって歩いていった。
俺は桜が家に入るのを見届けると自宅へと向かった。

自宅に着くと俺は靴を脱ぎすぐさま居間に向かう、
親が死んでいるので俺と姉と妹の三人暮らしの狭い家である。
そして網戸のそばにはいつも通り彼女が居る。
俺が彼女に触れると外からちょうど心地よい風が吹き、俺を癒してくれる。
ああ、なんて気持ちがいいのだろう。
俺は彼女と話すことなく、寝転がるとそのまま寝てしまった…

「お兄ちゃん！」
その声で、俺は目を覚ました。
目を開けると、不機嫌そうな女の子が俺を覗き込んでいる…妹の遥だ。
とりあえず俺は遥が俺を呼んだ理由を質問してみる。

「何か用？　てか何故に不機嫌？」
「…お兄ちゃんの事で、今日皆にからかわれた…お前の兄貴は変人だって」
「そいつらの名前教えろ、明日ぶっ殺す」
俺がそう言うと、遥の表情がますます険しくなる…何かミスったかな？
「今日、水上先輩振ったでしょ…しかも理由が彼女が居るからだって」
「事実だ！　愛しの彼女は今もそこに居るじゃん」
俺は彼女を指差す。すると遥は疲れたような顔をして言う。
「はぁ…もういい、この話はまた後で。姉ちゃんがご飯だってさ」
それだけ言うと遥は立ち去る。俺は立ち上がり彼女を抱きかかえるとキッチンに向かった。

飯を食べ、俺は風呂に入りパジャマを着るとすぐさま彼女の元へと向かう。
彼女は食事をした時と同じ体勢で、テレビのほうを向いている。
俺は彼女を抱きかかえると自室へ向かう。
自室に入りしばらくベットに寝転がって漫画を読んでいると遥が入ってきた。
遥は何かを決意したような瞳で俺を見ながら言う。

「お兄ちゃん、お願いだから扇風機を彼女とか言わないで！」

その後も俺と遥の言い合いは深夜まで続いた…

秋だけの恋人（前書き）

えーっとはい。

昔某所で書いた日常系のお話です。

ちなみに妹の遥は

私がここで連載している緋色の眼にも登場します＾＾

秋だけの恋人

秋になった。木々たちは赤く染まり、哀愁漂う雰囲気をかもし出している。
そして事件は起きた。まあ、まずはお兄ちゃんがそれに恋をしたところからはじめよう。

その日、夜遅くにお姉ちゃんは帰ってきた。
凄く機嫌がよくて何か包みのようなものを抱えている。
そして私のほうを見るとニヤリと笑いながら言う。
「ふっふーん！　いいもの貰ってきたわよ」
お姉ちゃんが自慢げに言うが私は勉強していたし、お兄ちゃんは押入れのほうで夏の間お世話になり、恋人でもあった扇風機にお別れを告げていた。
「ああ…来年までお別れだね…君が居なければ僕は夏を乗り切れなかった」
お兄ちゃんはパーツ一つ一つを丁寧に雑巾で拭きながら扇風機を片付けている。
すると、無視された事に苛立ったのかお姉ちゃんが声を上げる。
「あんた達これを見なさい！」
お姉ちゃんが包みから取り出したものは一言で言うと高いものだった。
しかし、私はそれを見てもたいした感想は得られなかった…
最近の若い子でコレが好きな子っているのかな？
「そ…それは！？」
お兄ちゃんは慌てて扇風機を押入れにぶち込むと、私達のほうに寄ってきた。
おい！　恋人はどうした。

お姉ちゃんはお兄ちゃんをみて満足したのか、笑顔で言う。
「明日はそれを使って豪華にいきましょ！　アンタらあまり遅くなく帰ってきなよ」
私はわかったと頷く。
しかしお兄ちゃんはそれを持ちながらうっとりとしている…
また、恋をしたか…でも今回のは儚いわね。

翌日、私が部活を追えて家に帰ると、お兄ちゃん廊下でへたり込んでいた。
お兄ちゃんは私を見ると震えた声で言う。
「聴いてくれ！　姉貴は殺人鬼だ…彼女が…殺されちまった…」
「まず、あの女は彼女を水につけ、その後下半身を切り取った…」
「そして酒を浴びせるようにかけ、最後に焼き網で焼きやがった！」
お兄ちゃんが玄関付近で、アホなことをわめき散らす…まあ、予想はついていたが。
大体、お姉ちゃんが人を殺すわけが無いじゃない。
すると騒ぎを聞いたお姉ちゃんが中から怒鳴る。
「うっせえぞ徹宵！　ぶち殺されたくなかったら黙ってやがれっ！」
…前言撤回かも。私は靴を脱いで家に上がると、お姉ちゃんが窓際で何かを焼いてる。
お兄ちゃんの言葉で大体メニューの予想はついていたが案の定だった。
お姉ちゃんは私を見ると笑いながら言う。

「お帰り。今日の晩御飯は松茸の網焼きよ！」

松茸は初めて食べたがとても美味しかった。私達は夢中で松茸を食す。

しかし、お兄ちゃんはついに食べにこなかった…

冬だけの恋人

冬が来た。
私達の住んでいる街では雪が積もり、どこを見ても白銀の世界。
私は、そんな世界の中を陰鬱に歩いている。
今持っている封筒の中には、大学が合格か不合格のどちらかが入っている通知書。
同じ大学を受けた徹宵と私はお互いの合否を確認するために徹宵の家に集まる事になったのだ。
「こんにちは～」
私はいつも通りの挨拶をして、徹宵の家に入った。
「お～う」
閑散としているけどどこか暖かい家。
奥のほうから徹宵の声が聞こえる。
私は居間へと向かった。
居間へいくと徹宵はコタツに座ってぬくぬくとしていた・・・あぁ、ムカつく
「ふう」
私はため息をついてコタツへと入り早速本題に入る。
「大学どうだった？」
「合格だ。あの大学はあの程度のテストで俺を落とせるとでも思ったのか？」
「そう・・・私はまだ見てないの」
「馬鹿め、さっさと見やがれ。どうして速攻見ないんだ？」
この野郎・・・乙女心を全くわかってない。
まあ、徹宵が乙女心などを理解した日には、雪が降るとかじゃすまない・・・
ゴジラ来襲ぐらいのレベルだ。
よし、勇気を出してみてみよう。

「開けま〜す！」
私は机の上の物をどかして封筒を置こうとした。
そしてアレをどかそうとした瞬間に徹宵の手が私の手をつかんだ。
え？え？え？え？・・・いきなり何？
「馬鹿！　彼女をどかそうとするな！」
「か、彼女？また新しいの作ったの？　しかもコレが？」
「人聞きが悪いな・・・今も昔も彼女一筋だ！」
この野郎・・・この前まで彼女が焼殺された〜とかいって泣いてたくせに。
しかも前回はマツタケ前々回は扇風機・・・そして今回はコレか・・・
こいつの将来が危なく思えてきた。
「彼女は俺を裏切らない、俺も彼女を裏切らない。どうよ？」
「どうよと言われても・・・あっそうだ！　あたしの合格」
私は封筒を開けると中の書類を見た。
そこには・・・合格の二文字が・・・やったぁ！！！
私が合格したと言う事を徹宵に伝えようとした時だった。
「うい〜ただいま〜」
徹宵の姉の良子さんが帰ってきた。かなり美人で私の目標の人。
良子さんは居間へ来ると私たちを見て言う。
「あら桜ちゃん、今日発表だよね？　どうだった？」
「はい！　無事合格しました」
「よかったね〜おい、糞徹宵お前はどうだったんだよ？」
「余裕だ。」
「へえ、まあよかったじゃん。あ〜腹減った・・・あっこれ貰うよ」
良子さんがさっき徹宵が恋人だと言った物を持っていく。
「待て！　彼女はコタツの上に居なきゃ駄目なんだ！　俺が許せない」

「うるせえ！　蜜柑ぐらいでがたがた言うんじゃねえ」
「コタツの上には蜜柑！　俺はこの景色を愛していたのに・・・また姉貴に恋人を・・・」
何か徹宵見ていて哀れに思えてきた・・・
しかも何気に私の合格の話題から離れてるし・・・
そして、徹宵は泣きながら家を飛び出していった。
まあ、この家族にはこういう雰囲気が一番にあっているなと私は思った。

冬だけの恋人（後書き）

次回最終回ｗ

感想、採点待ってますｗ

春の恋人（前書き）

最終章ですｗ

春の恋人

春になった。
だいぶ気候も暖かくなり、日が伸びた今日この頃。
弟と妹がそれぞれの学校へ進学するので、
今日はお別れ会もかねて花見をすることになった。
妹は全寮制の高校、弟は東京の大学、地元へ残るのは私だけである。
そしてアタシの弟は今日も馬鹿であった・・・

「貴様！　俺の恋人に小便を引っ掛けるとは何事だ！」
アタシは酒飲みながらそんな風景を眺めている。
徹宵の暴走の後に続いて遥と桜ちゃんが謝りながら徹宵を追いかけている。
「おい、そこのクソガキ！　俺の恋人に登るんじゃねぇ！」
「うぇ～んママ～怖いよ～」
「泣いて事が済んだら警察官はいらねえぞぉ！」
徹宵が子供にアイアンクローをしつつ説教をする。説教したいのはこっちだっつうの
その時、遥と桜ちゃんが徹宵に追いついた。おぇ・・・酒飲み過ぎて気持ち悪い。
「やめんかいっ！　この馬鹿徹宵」
「死ね、馬鹿兄貴」
桜ちゃんの拳が徹宵の顔にめり込み、徹宵は倒れた。
そしてすかさず遥が足を振り上げて徹宵を踏みつける、いいコンビネーションだ。
しかしタフがとりえの徹宵はすぐさま復活した。
「貴様ら何をする！？」
「アンタね・・・アレは虐待よ！」

「桜ちゃんのいうとおりよ・・・お兄ちゃんってホント馬鹿」
遥と桜ちゃんが徹宵を踏みつけながら言う・・・うわ、周りに人が集まってきたよ・・・
「しかしだなぁ・・・あのガキは愛しの彼女を踏みつけたのだぞ？」
「いいじゃない！　子供なんだから・・・」
「そうそう、桜に登るなんて子供なら当たり前じゃない！」
いがみ合う三人・・・いい加減馬鹿らしくなってきたのでアタシは喧嘩を止める事にした。
うおっとと・・・酒が入りすぎたせいか上手く立ち上がれない。
アタシは寄りかかっていた桜の木の枝に手を伸ばすとそれを使って立とうとした。

―ボキッ―

鈍く大きな音が響き渡り枝が折れた。そして喧嘩をしている三人も、観客達もアタシのほうを見た。
しばらくシーンとした空気となり、やがて徹宵が一歩前に出た。
「姉貴～！　よくもやりやがったな・・・今ここで松茸と蜜柑と桜の恨みを晴らしてやるぜ！」
徹宵を助走をつけて飛び上がると私に向かって襲い掛かってきた・・

徹宵を片付け、また酒を飲んだりしていると花見もそろそろお開きの時間だ。
遥はゴミ捨てに出かけ、アタシはトイレで死ぬほど吐いてきて、桜ちゃんは徹宵の看病をしている。

そしてトイレからの帰り、アタシが場所へ戻ろうとすると、
二人ははたから見てもいい雰囲気になっている。
アタシは茂みに隠れると聞き耳を立て始める。

「ねえ・・・徹宵は桜がすきなの？」
「ああ、俺の恋人だ！　誰にも否定はさせん」
「・・・・・ふーん・・・じゃあ問題です。私の名前は何でしょう？」
「藤川　桜だろ？」
「正解です・・・・・・じゃあ私も恋人にしてくれるのかな？だって私も桜じゃん」
うはー！！　ついに桜ちゃんあの馬鹿に告ったよ・・・義妹になるのかな？
あ～昔から薄々気づいていたけどまさか今日かましてくれるとはハッピーハッピー！
徹宵はそれから五分くらい黙っていたが、やがて小さくつぶやく。

「―――――ば」

小さすぎてほとんど聞こえなかったがアタシには言いたいことはわかっている。
さーてそろそろ出て行ってからかってやるかな！
アタシはそう思うと立ち上がって二人のほうへ向かった。

春の恋人（後書き）

四作読んでいただいた方ありがとうございました。
ショートショートを目標
にして書いた作品ですｗｗ

感想批評、お待ちしております

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5402a/

四季シリーズ

2010年10月8日15時34分発行